

繁栄と成長の創出

19世紀末に僅かな量で始まった日加貿易は、今や数十億カナダドル規模を誇るまでになりました。人口1億2,600万、巨大な経済をもつ日本は、規模も魅力も第一級の市場です。今日、カナダにとって日本は、第2の貿易相手国であると同時に、外国直接投資の面でも有数の投資国です。

20世紀への転換時には、英国と米国がカナダの外国貿易をほぼ独占していました。やがて日本への原料輸出が徐々に増加し始め、1920年代初期から半ばまでに早くも2倍の伸びを示しました。1923年時点で、日本はカナダの第4の輸出先に浮上。この傾向は20年代いっぱい続き、30年代の世界大恐慌で激減しました。

1950年代初期に両国の外交関係が正常化すると間もなく、日本は再びカナダ第4の市場に復活しました。60年代に入ると、カナダの企業や公的機関が日本に事務所を設置し、関係を強固にします。日本がついにカナダ第2の貿易相手国となったのは1973年。ちょうどこの頃、カナダの企業も新しい機会と成長の可能性を迎えていたのです。ごく最近まで、カナダの対日輸出は、英国、ドイツ、フランス、イタリアの4カ国への輸出合計額

を上回っていました。

有数の製造立国であるにもかかわらず原材料に乏しい日本は、原料の輸入に大きく依存しており、カナダは日本にとって原料の主要供給国となっています。しかし最近の統計によると、カナダの対日輸出は、ジェット機やコンピューターのソフトウェア、アイスワインやアパレル製品などから2x4住宅や冷凍フレンチフライに至るまで加工度と付加価値の高い製品が大幅に増えています。

カナダの対日サービス貿易も急増しています。ソフトウェア関連サービス、教育や語学研修、コンサルティングからエンジニアリング、デザインなど日本での多種多様な分野でカナダの活躍が見られます。観光の隆盛にも著しいものがあります。カナダは日本人に最も人気のある観光先のひとつであり、1997年には約70万人の日本人観光客がカナダを訪れました。

貿易が双方向であるのは言うまでもありません。カナダは過去、現在、将来ともに日本の輸出の強力な受入先です。とりわけ日本製の自動車、エレクトロニクス製品、その他各種工業製品をカナダは多数輸入しています。

日本の投資は、日加関係において非常に重要な役

割を果たしています。カナダには約400社の日系企業が事業を展開し、5万人以上のカナダ人を雇用しています。投資対象は、伝統的な天然資源産業にとどまらず、自動車組み立て部門や情報技術、観光、通信の分野へと拡大しつつあります。また日本の機関投資家は、カナダの株式・証券の大手顧客となっています。

カナダ側の対日投資は現時点では多くありませんが、日本経済再編が進むにつれ、カナダの企業や起業家に新たな機会が生じ始めています。

日加両国は、互いに最良の顧客であり、天与のパートナーです。貿易・投資の機会が今後も増え続ければ、日加関係はより一層多面的な繁栄へ向けて花開いていくでしょう。

In a Vancouver parade in 1926, a Japanese-Canadian float announces Japan's importance as a trading partner.

Lors d'un défilé à Vancouver en 1926, le char allégorique canadien-japonais annonce l'importance du Japon à titre de partenaire commercial.

1926年のバンクーバーパレードで、日系カナダ人の山車(だし)が練り歩き、貿易相手国として日本の重要性をアピールした。

